

尊厳

福間明子

夜のとばりは平行線に

この香は花橘か

風に乗って闇をすくいからめて

心に届くまでにしばしの時を

心を開くまでにしばしの時を

さりげなくという時期ではありません

すでに時は迫り来ています

すぐそこにあるのは底知れぬ畏怖

黄金律の素敵な季節

坂道の途中で見つけた満開の白い花

胸いっぱいはその香を吸い込んで

振り返ってみたのです

懐かしいものがよみがえってきて

抑えきれないほどあふれてきて

すべては遠い過去のことなのですが

過去とは限りません

いま一度風に心をのせます

何処まで運ばれていくのでしょうか

自由という予想もできないものに寄り添われて

運ばれていくのがわかります

わかる気分が欲しいと思うのです

それから尊厳の意味がころよく響くあたりに

待たれているように思うのです

ほのぼの明けの彼方に